

..... 編集後記 .....

◆つくばは梅雨に入り、うとうしい日が続いておりますが、降雨量が少なく、このままでは夏は水不足になるのではないかと心配しております。皆さんの方はどうでしょうか。

◆さて、今月号は大阪地域地質センターの創立50周年を記念してセンター職員の協力によって特集記事で紙面を構成しました。

昔は北海道、仙台、名古屋、大阪、広島、高松および福岡に地質調査所の出先機関があり、宮村 学氏のご指摘の通り地方行政に直接的な貢献をしておりました。10年ほど前の四国出張所の閉鎖を皮切りに次々と閉鎖され、今では大阪と北海道にあるのみです。このために、地質調査所と地方社会との関係が希薄になっているような気がいたしますが、“地質”を死語・廃語にしないために(金原啓司氏の巻頭エッセイ)、地域センターの存在は重要でしょう。

◆地質学は本来、生活に密着した学問です。陶器は我々の生活の中で日常的なものです。焼物用の粘土は段々枯渇してきて、輸入しているところもある現在、小村良二氏の「日本の陶土を訪ねて」は陶土の調査が地質学の重要なテーマの一つであることが理解されます。

◆寒川 旭氏の「活断層」調査回顧録は「地震考古学」の創始者ならでの記事で、読者の皆さんにとって活断層調査が身近に感じられることと思います。是非ご一読下さい。

◆地質学は断片的な事実から全体像を描きだすもので、推理小説と似たところがあります。鎌田浩毅氏の「アズキ火山灰の噴出源の決定」を犯人探し風に読んでいただければ、なるほどとうなづけるはずです。

◆我が国は工業原料鉱物資源の多くを輸入に頼っています。そのために、外国の鉱物資源情報を知ることが大事なことです。今回はインドシナのカオリンとろう石について神谷雅晴氏と須藤定久氏に紹介してもらいました。

◆南雲昭三郎氏の「地球深部の運動像をめぐる研究動向」(その2)と奥山(楠瀬)康子氏の低圧型変成岩での紅柱石と珪線石の相平衡とその化学組成の話は一般の人には難しいかと思いますが、学部学生諸氏が学問の流れを勉強するためには、このような記事も必要でしょう。南雲氏の最後の7行は忘れてはならない重要な指摘だと共感しました。

◆今月号はわかりやすい記事と難しい記事とのバランスがとれているような気がします。編集が終わってほっとする間もなく、次は8月号の原稿集めに頭を悩ませています。多数の皆さんからの原稿を首を長くしてお待ちしておりますので、気楽に投稿下さい。“地質”を死語・廃語にしないために、皆で協力して素晴らしい地質情報誌を作り上げましょう。

(有田正史)

地質ニュース編集委員会

委員長：有田正史

副委員長：石井武政

幹事：佐藤興平・今井 登・村上文敏・大熊茂雄

顧問：林 暉・石原舜三・大嶋和雄・高橋 博

事務局：総務部業務課広報係(山崎 浩・谷田部信郎)

〒305 つくば市東1-1-3 地質調査所

地質ニュース編集委員会

事務局 Tel. 0298-54-3520

Fax. 0298-54-3504

地質ニュースに関するご意見は編集委員会へ

地質ニュース	第503号	1996年	7月号
	定価	¥770	〒実費
1996年7月1日	発行		
編集	工業技術院地質調査所		
発行人	株式会社 実業公報社		
	代表者	林 光生	
発行所	株式会社 実業公報社		
	東京都千代田区九段北1の7の8		
	Tel. (03)3265-0951(代表) 〒102		
	振替口座 00110-6-32466		
	麹町局私書箱第21号		
印刷	小宮山印刷工業株式会社		

©1996 Geological Survey of Japan

●本誌は東京都の霞ヶ関政府刊行物サービスセンター、八重洲ブックセンター本店およびつくば市の友朋堂書店本店に常備してあります。品切れの際は店頭で注文してください。